

Title	いわゆるひとつのニューメディア論
Author(s)	塩野, 充
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 56 P.69-P.74
Issue Date	1985-02
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/65638
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

いわゆるひとつのニューメディア論

岡山理科大学理学部 塩 野 充

近頃、めったやたらと「ニューメディア」という言葉が世の中に氾濫し、TVやラジオ、新聞、雑誌の中で振り回されている。ニューメディアとかINS、LAN、VAN、CATVなどとやたら「アチャ言葉」が幅をきかし、横町の物知り御隠居でもついて行けなくなっている。長屋の八つあんや熊さんが質問に来ても御隠居には答えられなくなってきたのだ。おまけにTVのコマーシャルでも、エヘン虫などという生物学上存在しない昆虫を取り入れたノドの葉のCMなどは馬鹿々々しい半面、実に分りやすいが、なにやらインテリぶった女性が出てきて「だからインターフェイス」などとやられると御隠居はアタマにきて、又々血圧が上がるのだ。ところで念のために言っとくがこの御隠居というのは筆者のことでない。筆者はもう少しマシなのだ。それが証拠に、インターフェイスなどと聞くと即座にRS232Cが(これだけが)頭に浮かぶほどのニューメディア狂いなのだ。(RS232Cを知らない人はホホッ、と感心し、知ってる人はどのへんがニューメディアなんや?と馬鹿にするであろう。どちらも正しい受け取め方ではある?)。しかし、パソコンにつないで2000文字が表示出来るというたったそれだけでニューメディアTVと声高に叫んでいるコマーシャルも多いから、RS232Cも立派なニューメディアデバイスと言ってもさほどのはずれではないだろう。今にニューメディア対応型の洗濯機や冷蔵庫、炊飯器、エアコン、風呂がま、電子レンジなどが続々と現れてくる事だろう。そんな馬鹿な、と思う人はホームオートメーションの中のホームコントロールというものを知らないからだ。つまり、外出先からINSを使って自宅の全ての家庭機器を無人コントロールする手段である。INSはまだ将来の話であるが、とりあえず現在の電話回線を使ってこれをしようというシステムがナショナルからテレコントロールという名前で発表されている。けれどもよくよく考えて屁理屈をこねると、このようなホームオートメーションというものはINSの1つの用途としている在宅勤務、すなわちサラリーマンが会社へ出勤せずに自宅でTV電話やファクシミリをついた端末装置で仕事をするシステムであるが、この在宅勤務をすると亭主はいつも家にいるので外出先から家庭機器をコントロールする必要はないわけである。従って、INSのホームコントロールと在宅勤務の概念は互いに矛盾している?という事になるが……。尤も、奥さんがパートで働きに出て、亭主は家にいる事はいるが、縦のものを横にもしないという横着な亭主の場合はおおいに役に立つであろう。筆者も亭主たる者そうであるべきだと思う(?)。ところで、賢明な読者諸兄には無用だと思うがなかにはINSというものを御存じない奇特な方もおられるといけないので、説明しておく、INS(アイエヌエス、気の短い人はインスと読む)とはInformation Network Systemの略で、日本語に直訳すると情報網システムとなるがそうは言わずに高度情報通信システムといわれる。これはアチャラから輸入した

ものではなく、コチャラで独自につけた名前である。アチャラやコチャラといっても今の子供には通じないらしいが、これを読んでいる人は分るだろう。INS、すなわち高度情報通信システムとは日本中、大都会から狐や狸、ヤマンバの出そうなド田舎の津々浦々まで光ファイバーを人間の血管のごとく隅から隅まで、ずずずいーっと張りめぐらして、その光ファイバーの先っぽである各家庭に電話だけでなくTV画面やファクシミリ、パソコンなどつなげる物は全てつないでしまおう（犬の鎖までつないでしまうような犬当違いはいけない）という電話網、じゃない通信網である。北海道の自称名人と沖縄の村の腕自慢がTV画面を使って碁を打つ事だって出来るし、あづま男と京おんながTV電話で毎日デートする事だって出来るのである（但し、いかにINSが進歩してもkissは出来ない。ブラウン管についているホコリが口の中に入るだけである）。これを聞くと、冗談じゃない、電話を使って長い時間囲碁やデートなんかした日にゃー、あとで目ん玉が飛び出るくらいの高い請求書が来てあげくのはてはサラ金地獄に陥ってしまい、銀行強盗をしなけりゃならないじゃないか、という人もいるだろう。しかし、その心配は料金の遠近格差解消が実施されるとの事なので多分心配ないだろう。「多分」というのは筆者は電々とはデンデン関係のない人間なので保証はしかねるからだ。

筆者はここで大それたニューメディアの解説をしようとしているのでもなく、文明否定論者のようにやたらニューメディアを批判しようとしているのでもなく、又、メーカーなどのCMのように、やみくもにニューメディアを礼讃しようとしているのでもない。ヒジョーにクールな観点に立ってニューメディアの21世紀像を考えてみたいのである。ニューメディアとは具体的にどのようなものなのかというと、いろんなものが含まれる。現在、ニューメディアと言われているものの中で一般家庭に直接関係あると考えられる主なものは、衛星放送、CATV（有線テレビ、受信するだけの単方向CATVと、TV局と受信者が会話できる双方向CATVがある）、ビデオテックス（日本ではキャプテンシステムという船長さん（昔はフナオサと言った）のような名前、フランスではテレテルという恥ずかしがりやのような名前、カナダではテリドンという番頭はんと丁稚どんのような名前で、一般的には文字図形情報ネットワークという）、VRS（画像応答システム、ビデオテックスとの違いは図形と画像で、図形とは中間調のない2値パターンであるのに対し、画像とは中間調のある濃淡画像である。しかもVRSの方は絵が動く動画像である）、テレテキスト（文字多重放送、略してモンタなどと猿の名前のような言い方もある）、そして家庭にいたままで買物の出来るホームショッピング、家庭にいたままで銀行の自分の口座のお金を動かせるホームバンキング（近頃よく聞くファームバンキングというのは家庭ではなく会社にいたまま会社の口座のお金を動かすシステムである）、前述したホームコントロールなどをひっくるめたホームオートメーションなどであろう。このほかにも衛星通信、LAN、VANなど賑やかにあるが一般家庭には関わりが薄いので省略しよう。筆者はこれらのニューメディアは二種類に弁別出来るのではないだろうか

と思う。1つは本当に社会的ニーズが高く、社会的意義が大きいものと、もう1つは単にお金持ちで物好きな人のオモチャ的存在に過ぎず、社会的ニーズが高いとは考えにくいものである。前者を地に足のついたニューメディアとすれば、後者はうわついたニューメディアと言えよう。前者の例としては、衛星放送がある。これは離島などでも本土と同じTV放送をリアルタイムで見る事が出来るようになった意義は大きい。又、INSによって電話がデジタル化され、遠近格差がなくなる意義も大きい。家庭にもファクシミリが普及することの意義も大きい。聴覚障害者でも電話が使えるようになるのである。又、発信者の電話番号が電話機の液晶ディスプレイに表示されるので、かけてきた相手が誰であるか受話器を取らなくても分る。これによって誘拐や脅迫、イヤガラセなどの電話を用いた犯罪は激減するだろう。テレテキスト、即ちモンタはNHKの『おしん』で使われ、聴覚障害者のために大いに役立った。これらのニューメディアに関しては筆者は非常に社会的意義も大きいし、どんどん世の中に受け入れられて成長してゆくであろうと思う。これらはいずれも地域的、身体的情報格差を解消とまではいかないにしても大幅に緩和するものである。しかし、CATV、キャプテン、ホームオートメーションについては筆者にはかなり消極的な予測しか浮かばない。日本では現在、NHK総合と教育の2チャンネル、民放はTBS系（関西では毎日放送）、テレビ朝日系（朝日放送）、フジ系（関西テレビ）、日本テレビ系（読売テレビ）の4大系列に大都市ではテレビ東京系（テレビ大阪）など4～5チャンネルの民放があり、ローカルなUHF局も入れると6～7局にもなる都市もある。今はこれらの局が入らない地域でもいずれ殆どネットワーク化されるであろう。NHKを除けばこれらは全てタダで見れるのである。これだけのチャンネルがあるにもかかわらず、さらにお金を出してまでこれ以上のチャンネルが欲しいと思う人が果たして日本人の中にどれだけいるであろうか。タダであれば確かにチャンネルは多ければ多い方が良いに決まっている。しかし、お金を出してまで映画を見たい、ニュースが見たい、天気予報が見たい、歌番組が見たい、ドラマが見たい、……と思う人がどれだけいるであろうか。一般に日本人は情報に対して金を払いたがらない国民であるとよく言われる。現にNHKの受信料でさえ払わない連中が増えているという。NHKの報道姿勢が気に入らないとか番組がつまらんとか、もっともらしい屁理屈をこねてはいるが結局のところは本音を吐けば金を出すが惜しいからにはかならない。もし、そうでなく本当にNHKを批判するのであれば毎月の受信料に相当する金を福祉施設にでも寄付すべきであろうが、そんなことをしているという話は少なくとも筆者は残念ながら聞いたことがない。なお、念のために言っておくが筆者はNHKとはナーンニモ関係ないフリー人間である。話がそれだが、このように日本人は情報に対してケチな人が多いのである。しかしその半面、殆どの家庭では新聞をとっているし、駅の売店ではスポーツ新聞がよく売れているし、週刊誌も非常に沢山のレベルや種類があるが共倒れもせずによく売れているようである。最近では郊外型書店といって、少し町はずれにあり、大きな駐車場のある本屋さんがあちこちに出来て結構繁盛しているそう

である。このことを見ると日本人は決して情報に対してケチではないではないかという見方も出来る。このことから考えると、日本人はテレビやラジオのようなソフトコピー的の情報(その場限りの絵や音)に対しては『タダ』ということを期待し、金を払いたがらないが、本や雑誌、新聞などのハードコピー的情報(印刷物)にはわりと気前良く金を出す。ハードコピー的情報は紙、すなわちモノとしての実体があり、どこへでも持ってゆくことができ、どこでもなんの装置も必要とせず何回でも繰り返して見ることができ、あとは人に譲ることも出来るし、新聞なら弁当を包むという第二のお役目だって立派に果たせるのである。これにひきかえ、ソフトコピー的情報は時系列であぶくのごとく消え去ってしまう。この分類でいけばCATVは明らかにソフトコピー的の情報であり、キャプテンシステムは必要ならばプリントアウト出来るとはいってもやはりソフトコピー的情報に入るだろう。テレビで映画を放送するようになってから映画館に行く人が激減したそうだが、これはなにも映画館へ行くのがじゃまくさいというからだけではない。映画館へ行けば高い金を取られるが、テレビだとタダで見られるからである。日本人は一億総中流意識の時代になったとはいうが、現実そんなに経済的余裕があるわけがない。だから本当に実生活に必要なニューメディアでない限り、一般庶民は財布のひもをゆるめる事はないであろう。一般庶民、すなわちレオナルド熊の言うところの『一般大衆』をおいてけぼりにしてはニューメディアの健全な成長は望めない。勿論、現在のメディア(トラディショナルメディアという)について考えてみても、電話やテレビは最初はお金持ちしか買えなかったことは事実である。これらのトラディショナルメディアが今日のように一般大衆の間に普及したのは勿論メーカーのコストダウンへの努力も大きいだが、これらのメディアをコストに見合う生活必需品として一般大衆が認めたからである。今やよほどの変人でもない限り、電話やテレビなしの生活は考えられない。そして電話料金や、テレビに払う受信料や電気代が生活を圧迫しているとは考えにくい。CATV、キャプテン、ホームオートメーションが何年後に現在の電話やテレビのように庶民の生活必需品になっているであろうか。ニューメディア礼讃論者にはお叱りを受けるかも知れないが、その可能性は半々としかいいえないと筆者は思う。一説によると一般大衆、とくに男性諸氏は低次元な欲求、即ち色欲と金銭欲に関わる情報には気前よくお金を払うという。これは嘆かわしいことであるとPTAのお母さん方が叫んでみたところで厳然たる事実、いや太古からの真理である。だからCATVやキャプテンシステムがてっとり早く繁盛しようと思えばポルノとギャンブルを流せばよい。CATVの本家アメリカでもこれは明らかだそうである。しかしそのようなCATVを家庭の中へ引っ張ることを日本のお母さん方が許す筈はない。そうなるともう少しレベルのましなもので家庭に入り込めるものとなるとスポーツか普通の健全な映画ぐらいであろう。しかしこれらは普通のテレビ放送でかなり放映しているのである。それに対抗しようと思えばよほどの付加価値がないとお客はつかないであろう。例えば、筆者なども御多分に洩れずプロ野球ファンである。岡山という、大阪と広島のプロ野球の谷間に住んでいる

ので公式戦を見れる機会は年に数回しかない。だから大阪や東京に行った折はナイターを見に行くのを楽しみにしている。テレビでもナイターを中継しているが巨人カードだけであり、昨年(1984年)のようにシリーズ終盤で広島と中日が首位争いのデッドヒートをやっている晩でも、巨人対どんじりの大洋やヤクルトのダラダラした試合を漫然と放送している。こういうときに好きなカードの見られるプロ野球専用CATVがあれば筆者などの野球狂いは少々高くても契約するかも知れない。とくにパリーグの好きな人はテレビでは殆ど放送がないだけに価値があるだろう。300勝投手の近鉄の鈴木啓示氏が言っていたが、セリーグの巨人阪神戦などは客は沢山入るが選手をタレントのように見て黄色い声を出すだけのミーハー族が多いのにたいして、パリーグは確かに客は少ないが野球をじっくり見てやろうという、目の肥えたクロウト筋が多い。筆者もそのクロウト筋の一人であると自認(?)している。話が脱線したが、CATVで映画を流すのはアメリカで流行っても日本ではそれほど繁盛しないのではないかと筆者は思う。日本人はアメリカ人ほど映画好きじゃないし、映画にはプロ野球中継のような即時性の必要性がなく、待っていればそのうちテレビ放送で流すだろうと思う人が大部分であろう。筆者は渥美清氏の寅さん映画が好きであるがCATVを引かなくても結構テレビで見ることが出来る。放送される時間に見る必要はなく、ホームビデオにタイマー録画予約しておけばよいのである。つぎにキャプテンシステムであるが、キャプテンシステムはギャンブル、とくに在宅ギャンブル(?)にもってこいのメディアである。最近よく言われるが、キャプテンシステムが繁盛するには中央競馬会がIP(情報提供者)になって、キャプテンシステムで馬券が買えるようにすればよい。そうすれば暴力団の資金源になっているノミ屋(一杯呑み屋とは違って、いわゆるノミ行為、すなわち私設馬券を売る連中)が激減し、キャプテンシステムは爆発的に繁盛するであろう。但し、そのかわり家計を握る奥さん方の苦情も爆発するであろう。つぎにホームオートメーションであるが、ホームオートメーションのうちのホームバンキングというのは主婦がしっかりしている家庭という条件は必要であるが、かなり便利なものであると思う。第二土曜日にはキャッシュカードが使えないというような馬鹿げたこともなくなるであろうし、日曜日でもお金が降ろせるようになってもらいたい。これはやってやれない事ではない事は益田喜頓氏のCMで有名なサラ金屋さんのキャッシュカードが日曜日でも使える事から証明済みである。ホームバンキングが実現したところで自宅の端末装置から現金が出てくるわけではないが、ホームバンキング時代ともなれば銀行の現金自動引き出し機が土曜の午後や日曜でも使えるようになるであろう事を期待したい。買物が全てカードで出来るキャッシュレス時代になってもコーヒー一杯飲むのにカードを振りまわすのもおおげさである。第一、受取る方は現金の方が有難いに決まっている。いざという時、頼りになるのはカードではなくて福沢諭吉先生(一番頼りになる)や新渡戸稲造先生(やや頼りになる)、夏目漱石先生(少々頼りない)である。しかしながら、ホームショッピングというのはまず流行らないであろう。ウィンドウショッピングという言葉があるように、デパートなど

ヘショッピングに行くのは女性に限らず、男性でもひとつの娯楽、楽しみ、気晴らしになっているものである。テレビ画面を見てショッピング、なんて少なくとも筆者は少しも楽しいと思わない。品物というのは見るだけじゃなくて、触ったり、重さを確かめたり、音を聞いたり、実際に操作したりして買うか買わないかを決めるものである。例えばバッグなどでは口金を開閉するときの感触、万年筆では書き具合と握り具合、靴では履き心地、傘では開閉のスムーズさ、ズボンでははいたときのおなかやお尻の余裕、ネクタイでは滑りのよさ、等々、物を買う場合、見るだけで触る事なしで買うというのは稀である。高額商品になればなるほどこの事がいえる。従ってホームショッピングが成り立つのは低額商品、つまりティッシュペーパー、トイレットペーパー、フィルム、文房具などの日用品、野菜、魚、肉などの食料品ぐらいであろう。しかしこのような低額商品ばかりを扱っていてホームショッピングは果たして採算が取れるかどうかは問題である。ただ、食料品が殆どホームショッピング化されるとグリコ・森永事件のような食料品の流通を逆手に取ったような悪質な犯罪は出来なくなるだろう。しかし、ホームショッピングで食料品を買うとスーパーに出掛けて買うよりもペラポーに高いというのでは誰も相手にしないであろう。ホームオートメーションのなかのホームコントロールは前述したようにまことに贅沢三昧の結構な設備ではあるが、人間というもの、ここまでずばら、横着、怠慢 etc. になってしまったらおしまいではないかと思うのだが、読者諸兄はいかがお考えであろうか。人間が文明というヌカミソの中にどっぷりとつかった潰け物のようにになってしまう事が果たして幸せなのであるか。そのヌカミソが一時的にも無くなった時の事を考えると恐ろしいような気がする。電動式鉛筆削り機がないと鉛筆は使えないものと思っている子供が大部分だそうである。物質文明の進歩を決して否定するわけではないが、ニューメディアの進歩が、文明の低下（一時的にせよ）に対する人間の抵抗力、耐性を極度に弱めていくとすればこれは決して喜んではいられないのである。昨年、世田谷区における通信回線の切断事故はこの事を端的に暗示している。電話という極めて単純なトラディショナルメディアでさえ、一旦システムダウンすれば大混乱に陥るのである。あの場合は自転車に乗った伝言屋さんが大活躍したそうであるが、キャプテンシステムやホームオートメーションがダウンしたらいったい何屋さんが走り回るのであるか。それともそんなものは電話のような生活必需品じゃなくて、あってもなくてもよいものだからダウンしてもどうってことはないであろうか。以上、老婆心ながら、過熱した霧囲気に振り回されない、ニューメディアのしっかりと地に足のついた健全な発展を願って、とりとめない駄文を終わる事にしよう。

（岡山理科大学助教授 / 自称(?) ニューメディア評論家）